

南風強く不動の森の椎の木が明日の入梅告げて騒立なまつ 水本光

「南風強く」↓「椎の木が」↓「騒立つ」と、初句から結句までしっかりと文脈がつながっているので、芯の通った歌になっている。姿のいい一首。

軽トラをきりつと停めておぼちゃんがなすびの苗を納品に来る 塚本瑞江

高知の朝市に取材した旅の歌。「きりつと停めて」がアクセントになって、はちきんの「おぼちゃん」の行動力、エネルギーがクローズアップされている。

柿の木のキジバト夕陽に輝きまてころ弱ればうつくしき刻 高山邦男

下句、予定調和的な世界に落とし込んだ感じもないではないが、ふだんは地味なキジバトにスポットライトが当たったはなやぎを、みごとに表現している。

白玉のフロンタガラスに尾を曳きて濡れるも果てぬ恋もするかな 中村佳文

オリジナルな、長い序詞が楽しい。初句からずつと序詞になっていて、「……果てぬ恋もするかな」以下を導き出すかたになっている。読者は遊び心を楽しみたい。

みづからの目玉を匙で掬ひだす大道芸を眺めて去りぬ 服部崇

上句、ていねいに描写して読者をおどろかす趣向を盛り上げている。下句、「……去りぬ」と完了形でおさめてしまわなかった方がよかった。もったいなかった。

短歌の現在

No.438

今月の15首を読む

佐佐木幸綱

海に沈む夕陽美しスマホには入りきれない光の嵩よ 細溝洋子

この作者の作とは思えない素朴な比喩が楽しい。スマホはここでは画面の意味で厳密にいえばおかしいが、まあいいだろう。

海に開き明るく雨の多き街に幾たびも来て幾度も去りき 河野千絵

長崎をうたった一連中の作で、歌のなかの「街」も長崎である。作者は長崎で教員をしていたことがあったはずで、また竹山広さんを短歌の師とあおいでいたこともあって、その後も何度も長崎を訪れている。下句は事実にもとづいた表現らしい。固有名詞を出さないで長崎を表現した上句の工夫。

ときに聴く昭和フォークのアルバムは煙草の匂いをケースに宿す 菅田恵子

アルバムの持ち主の父上が煙草のみであることを背景にする作で、じつさいにケースが煙草くさい、そんな意味を読んでいいようだ。昭和は煙草の時代だった。個人にとつてもそうだったし、日本全体をとつてもそうだった気がする。下句、実際のおいではなく、シンボリックな意味を読み取っていいのだろう。

石原裕次郎の映画を見ると、いつでも煙草を吸っている。兄頼綱は一日百本の煙草を吸う父親を見ているが、昭和最後の年に生まれた弟定綱は、父が煙草を吸っているのを見たことがない。昭和三十年代に他界した私の父